

日本語学校での効果的な辞書の活用を目指して

吉村淳代

要旨

日本語学習者は、レベルを問わず辞書を使用して学習を進める。辞書は、学習者にとって欠くことのできない重要なツールである。本稿ではまず、辞書の形態の変遷を確認したうえで、学習者の使用する辞書の形態の変化をまとめた。現在では様々な辞書アプリが存在し、学習者はそれぞれの特徴を把握しておかなければ、的確に辞書が使用できないことがわかった。それえゆえ、学習者のレベルに合わせた効果的な辞書使用の指導が必要であると言える。

【キーワード】 辞書 辞書の使用 辞書アプリ 学習アプリ

1. はじめに

ライティングの指導の際、教師は学生の語彙の選択が不適切なことに気づくことが多い。例えば、初級レベルの学生が google 翻訳の画面を筆者に見せ、「indispensable」の日本語訳は「必須」でよいのかと質問してきた。「必須」は、初級レベルのライティングで使用するには不自然な書き言葉である。どのような文脈で使用するのかが重要になるが学生にはその認識はなく、見たことがない漢字が出てきたので教師に確認したかったのだろう。改めて google 翻訳で「indispensable」を引いてみると、「不可欠、必須、必要」の3つの語彙が出てきた。学生はこの3つからどのような方法で、どのような理由で1つを選択するのだろうか。教師はその過程を考慮せず、機械的に適切な語彙に訂正してしまう。また、漢字圏の学生は母語の語彙をそのままライティングに使用することが多く、やはり適切な語彙の選択が苦手である。この2つの例は、学生が辞書を効果的に使用していないことを示しているだろう。

では、日本語学習を開始するとき、学生はどのような辞書を選ぶのだろうか。日本語の能力が高まるとともに利用する辞書は変化するのだろうか。また、辞書を選ぶポイントはどこにあるのだろうか。そして、教師はどのような辞書を学生に勧めればよいのか、辞書の引き方を指導するとともに辞書を効果的に活用するためにはどのような点に留意すればよいのだろうか。

本センターの学生は2010年頃を過ぎても、紙の辞書を使用していたように記憶している。また、会員制の辞書引きサイトを使用している学生はほとんどいなかったのではないだろうか。2008年のiPhoneの登場以後、日本のインターネット環境が整い、通信費が安価になりだしたところから無料の辞書引きサービスを使用するようになり、現在ではスマホ辞書アプリを多用している。

学生の辞書使用の変化から何がわかるのだろうか。次章では、年代ごとの辞書使用の特徴をまとめる。

2. 紙の辞書からスマホ辞書アプリへ

最初に、辞書の形態がどのような変遷を遂げてきたかを確認しておく。長谷川（2016）によれば 1980 年代から 2010 年ごろまで、辞書の形態には以下のような大きな変化が見られた。紙の辞書からの大きな転換は CD-ROM の登場であった。CD-ROM の書き換え不可である点が、辞書としての利点となった。1987 年に「広辞苑第三版 CD-ROM 版」が発売されたが、当初はパソコン等でしか使用できなかった。続いて 1990 年に 8 センチのコンパクト CD が利用できる「電子ブックプレーヤー」が登場した。小型なので携帯しやすく、辞書専用機だったため、一般にも扱いやすい辞書として認知された。単語帳レベルの電子辞書は 1979 年より電卓メーカーを中心に発売されていたが、1992 年発売の研究社の『新英和・和英中辞典』が初めての本格的な電子辞書となった。単語帳レベルの電子辞書とは、豊富な例文や同意語などの記載がないシンプルなものを目指す。インターネットの広がりやスマートフォンの影響で電子辞書の販売台数は 2008 年以降減少した。ただし、学習用の電子辞書は現在でも一定の需要がある。そして、ケータイ辞書、インターネット辞書が登場し、ケータイ上の会員制辞書引きサイトが増加した。会員は毎月定額を支払い、三省堂の『大辞林』などの辞書を利用できる。この新しい市場に辞書出版社が続々と参入した。2000 年前後にはインターネットにおいて三省堂の「Web Dictionary」や株式会社ネットアドバンスによる「ジャパンナレッジ」などに代表される有料辞書引きサービスも提供され始めた。その後、Wikipedia が登場し、Yahoo! の Yahoo! 辞書 (2013.12.3~2019.5.3) や goo の goo 辞書 (1999.8.2~) などのポータルサイトでの辞書引きサイトが提供された。辞書引きサイトとは、インターネット上で様々な種類の辞書が無料で引けるサイトのことである。以上が長谷川（2016）による辞書の形態の変遷である。

そして、現在では「Google Translate」に代表される辞書アプリが多く使用されている。辞書アプリとは、スマートフォンやタブレットで使える電子辞書を指し、端末にダウンロードしてオフラインで使用するタイプ、サーバーと通信しオンラインしようするタイプ、それぞれ無料のものと有料のものがある。

以上のように、わずか 20 年ほどの間に辞書の形態は大きく変化している。著者は教育現場で、2005 年ごろに紙の辞書から電子辞書に切り替えた。ネット環境が整っている場所が少なく、電子辞書のほうが扱いやすかったからである。

3. 学習者の辞書使用の変化

先行研究を探すにあたって気づいたことは、辞書の編集や取り上げるべき語彙等に関するものはかなりの数があるのだが、日本語学習者の辞書利用に関するものが非常に少ないことである。本数は少ないが的確な指摘がなされているので、以下に年代別に見る使用辞書の形態の変遷をまとめておく。

比較的古いものとして、マリィ（1994）の辞書使用の調査結果について述べる。日本語能力のレベル初級から上級の日本の大学に在学する日本語学習者で、漢字圏・非漢字圏のどちらも含む学生を調査したもので、全体的に紙の辞書の使用率が高い。また、単語帳レベルの電子辞書の使用が一部に見られた。この結果は前述した辞書の形態の変遷に沿っていることがわかる。本格的な電子辞書が登場したばかりの時期だったため価格も高く、使用する学生がいなかったこともうなずける。

次にフメリヤク（1996）は、非漢字圏の被験者が 5 人と少数ではあるが、2 人が単語帳レベルの電子辞書を使用しているのは、非漢字圏の学習者にとって紙の辞書の使用は大きな困難を伴うため、単語帳レベルの電子辞書のほうが扱いやすいのだらうと述べている。そして、自分に合った辞書を使用すること、効果的な辞書の引き方を早い段階で指導することの重要性を強調している。

2000 年代に入ると、J-STAGE には国語教育、英語教育の現場における電子辞書の使用に関する論文が多く見られることがわかる。紙の辞書と電子辞書のどちらがよいかと論じるものや、電子辞書の効果的な使用法などを示すものが多くみられる。これも前述の流れに沿ったものである。現在でも大型電気店では、電子辞書のコーナーがあり、小学生用からビジネスマン用まで様々な電子辞書が並んでいることからわかるように、学習用の電子辞書の需要はいまだに高いという長谷川（2016）の指摘に合致している。

だが、日本語教育における辞書使用を論じるものはほとんど見当たらない。その理由として、辞書の急激な変化に現場がついていけなかったことが考えられるだろう。インターネット環境の整備の遅れが現場での使用を制限することになるため、一般論として論じることが困難だったのではないかと考えられる。

最近のものとして、板井・寺嶋（2019）と寺嶋・板井（2019）が挙げられる。板井と寺嶋はライティング時に日本語学習者がどのような辞書を使用しているか調査し、分析している。その分析によれば、初級、中級、中上級、上級のレベルを問わず、全体的にアプリ辞書とオンライン辞書の使用が多いことがわかった。また、寺嶋・板井（2019）のスマートフォン辞書アプリについての調査によると、初級・中級レベルでは「Google Translate」と「imiwa?」がよく使用されていることが明らかにされている。前述したような辞書の形態の変化に伴い辞書使用の実態も変化していることが、論文のテーマからもよくわかる。そして、これらの論文は、辞書使用の指導が非常に重要であることを指摘している。

また、総田（2003）の調査では、学習者が作文をする際に辞書を使用した際、適切な語彙を選択することが困難であることを述べたうえで、辞書の使い方の指導を行うべきだと指摘している。板井・寺嶋（2019）は、多くの学習者がスマートフォンの辞書アプリや辞書引きサイト利用の際に、「文法情報がない」「例文がない」などの問題を感じているとしたうえで、教員ができることを提言することは今の段階では難しいと述べている。だが、教員がさまざまな辞書の特徴と使い方を説明することはできるであろう。

4. まとめと考察

以上をまとめれば、どのような形態であれ、辞書の使用は学習者にとって必要不可欠なものであるにもかかわらず、現在の辞書の使用とその指導には様々な問題点が指摘されている。なぜ現場では辞書の使用についての指導がほとんどなされていないのであろうか。その理由として、①学習者が自然に使い始めているため、指導者が改めて辞書についてアドバイスや説明をする機会があまりないこと、②辞書を使い始めるためにはまずひらがなとカタカナを覚えなければならない、その指導に時間がとられること、③学習者のレベル、ニーズ、購入可能な金額、好み等が異なるため、指導者が具体的に勧めることが困難であること、が考えられる。

しかし、辞書は日本語に触れる機会がある限り使い続けるものである。明確な目的と使用条

件を考慮せずに辞書を選ぶことは、日本語の学習に大きな影響を与える。また、使用者がほとんどいないことを理由に、紙の辞書の引き方を指導しないことは危険であろう。大学院の入学試験では特に外国語の試験の際、紙の辞書に限り持ち込み可、貸し出し可の場合もある。大学、大学院等に進学後、その専攻によっては特殊な専門用語辞典等は、紙の辞書が多いかもしれない。

学習者が日常に使用する辞書はもちろん紙の辞書も、その特徴の解説と使い方の指導が必要であることは明らかである。引き続きこの課題に取り組み、どのような学習者にどのような指導が効果的かを探る。

5. 本研究の今後の調査・分析

前述のように、辞書の形態の変遷、日本語学習者の辞書使用の変化を確認し、辞書使用の指導が非常に重要であることを確認した。今後、以下のように研究を進めていく予定である。

まず、本センターの学生の辞書使用の実態調査を行う。初級・中級・中上級・上級のレベル別に、母語、使用する目的を軸にアンケート調査をして、実態を探る。日本語のレベルが上がるにつれて使用する目的と辞書の形態はどのように変化していくのだろうか。

次に、本センターの教員に対して学生の辞書使用に関するアンケートを行う。教員が学生の辞書の使い方について日頃感じている問題点を取り上げ、学生へのアンケート結果とすり合わせ、辞書の使用を指導するにあたっての留意点や効果的な方法を探る。先行研究では学生の実態だけを分析しており、すり合わせを行うことで新たな方向性を提言できる可能性がある。

本研究に取り組むにあたり、課題を辞書の使用だけに特化しないほうがよいと考えるようになった。学習アプリの存在を無視することができないからである。令和5年2月5日、日本学生支援機構日本語教育センター主催の研究協議会「日本語学習者の自学習の方法から考えるこれからの日本語教育～日本語教師にできること～」において、日本語教育センターより自学習についての調査報告がなされた。在校生と卒業生計313人に行ったアンケートによると、日本語の自学習のためにどのようなアプリ（辞書アプリを含む）を使用しているか（複数回答可）の回答には、22種類ものアプリが挙げられた。使用するようになったきっかけは、①自分でネット検索して見つけた、②友達や先輩に聞いた、③先生にすすめられたとの順で回答があった。学生が学習アプリの情報を手に入れ、自分に合ったものを使用している実態が明らかである。学生の学習にとって学習アプリの使用は重要な要素になっている。2010年以降より日本語の学習アプリに関する論文数が増加しており、J-stageでは2023年5月現在、180本以上が投稿されていることから注目度がわかる。

この学習アプリの可能性を探るために、実際の授業で辞書機能に特化した学習アプリを学生とともに使用する。筆者は、大学院進学希望者の授業を担当している。大学院に進学するためには、研究計画書の作成が求められ、入学試験では専門科目の受験が必須である。研究計画書は大学院で自らが研究したい内容をまとめるもので、専門用語を使用しなければならない。専門科目の試験には、専門用語を説明させる設問が多く出題され、やはり専門用語の理解が必要である。そのため、これまでは自分に合ったやり方で専門用語帳を作成するよう指導してきた。今年度は、専門用語を抜き出すことができる学習アプリと目的に合った辞書が作れる学習アプリを併用して、専門用語ノートを作成する。学生任せにするのではなく筆者自身も作成に参加

し、課題を探る。

日本語の学習には、辞書の使用が不可欠である。だが、辞書の形態の変化は激しく、学生は目の前にある辞書を問題意識を持たず手軽に使用し、教員は辞書使用の問題点を深く認識せず、辞書の引き方の指導さえも行えていない。さらに、さまざまな学習アプリの利用と組み合わせればより効果的であることに注目し、本研究ノートの指摘に対する結論を導き出すために、23年度に的確な調査・分析を行う予定である。

参考文献

- (1)板井芳江・寺嶋弘道(2019)「日本語学習者の辞書使用の実態－ライティング時の辞書使用に注目して－」『日本語教育方法研究会誌』25(2), pp.4-5
- (2)総田はるみ(2003)「日本語学習者の辞書使用の状況」『日本語教育方法研究会誌』10(2), pp.14-15
- (3)クリスティーナ・フメリャク(1996)「日本語学習者の辞書使用における実態調査」『日本語教育方法研究会誌』3(1), pp.18-19
- (4)クレア・マリィ「日本語学習者の辞書使用」『日本語教育方法研究会誌』1(3), pp.34-35
- (5)国立研究開発法人科学技術振興機構「科学技術情報発信・流通総合システム」(J-STAGE)
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja>(2023年5月30日取得)
- (6)寺嶋弘道・板井芳江(2019)「スマートフォン辞書アプリについての一考察」『日本語教育方法研究会誌』25(2), pp.66-67
- (7)長谷川秀記(2016)「日本の電子出版30年の軌跡－電子辞書・電子書籍の黎明期から現在まで－」『情報管理』59(9), pp.588-593